

命の尊さを感じる総合的な学習

—第6学年「ヒロシマ・ナガサキを見つめて」の実践から—

谷 栄 次

1. はじめに

本校の総合的な学習「人間」のねらいは、「人と人との関わりを通して自分自身を見つめ、人間としてよりよく生きていこうとする子どもを育てる」である。そのねらいを実現するためには、命の尊厳を感じ、生きている実感や自分自身の成長の喜びを味わえるような体験が必要である。

本単元は、学年行事（PTC活動）での広島原爆資料館見学と旅の学習（長崎への修学旅行）を活用して、「命」に目を向け、自分自身を見つめることをねらいとして設定した。実際に見たり聞いたりする体験の場でふくらんだ自分なりの思いや感じたことを自分なりの方法で表現する、この一連の活動を通して、子どもたちは「命」の大切さや「生きる」ことに対する思い、さらには自分なりの平和観をもつことができるのではないかと考えた。そこで本稿では、子どもたちの思いがどのように表現され、どう「自分」や「命」を見つめたのかについて考察していくことにする。

2. 単元「ヒロシマ・ナガサキを見つめて」について

(1) 「ヒロシマ」と子どもたち

6年生の子どもたちのほとんどは、何らかの形で一度は平和公園や原爆資料館を訪れたことがある。また、家族や親戚など身の回りの人が戦争や原爆によって被害を受けているという子どもたちも学級で4分の1程度いた。その中には、戦争時の生活の様子や原爆の落とされた時の様子について、話を聞いている子どもも数名いた。広島・長崎に原爆が落とされたことについては、ほとんどの子どもたちが知っている。しかし、そこに人々のどのような苦しみがあったかなどについては、「ひどいものであった」「大変なものであった」など、漠然としてしか捉えていない子どもたちが多いように感じた。

(2) 単元のねらい

◎ヒロシマ・ナガサキを見つめることを通して、「命」に目を向け、自分の思いを表現することができる。

○他人の思いにふれ、さらに自分の思いを深めたり広げたりすることができる。

(3) 活動計画と内容

第一次

6月「ヒロシマ」の学習

- 「ヒロシマ」とは？
- 調べよう「ヒロシマ」
- 原爆資料館へ（PTC活動）
 - ・被爆体験証言者の話
 - ・原爆資料館見学
- 「ヒロシマ」への思い

第二次

10月「ナガサキ」の学習

（旅の学習グループ別行動）

- 調べよう「ナガサキ」
- 原爆資料館へ
- 長崎の街を歩いて
- 11月「ヒロシマ」「ナガサキ」
を見つめて
- 自分の思いをまとめよう—

第三次

Lifeワールド

をつくろう

- 自分の思いを
伝えよう—
- Lifeワールドって？
- Lifeワールドをつくろ
う

3. 考察

(1) 子どもたちの表現活動について

「ヒロシマ」「ナガサキ」を訪れたことをもとに表現活動を考えると、テーマが「戦争」「平和」というものになる。テーマが大きすぎることもあって、子どもたちのほとんどが造形的な活動を考えていた。そこで、もう一度自分の伝えたい思い（メッセージ）をふりかえり、どういう表現方法ならそのメッセージが見る側に伝わるのかを考え、個別・グループ別にその思いを聞いていった。その結果、自分の伝えたいテーマと表現方法は次のようなものとなった。

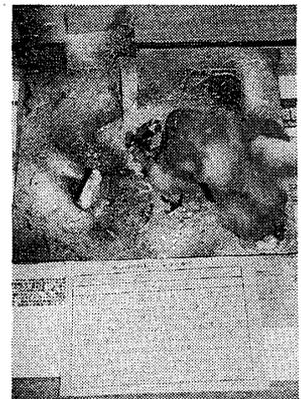
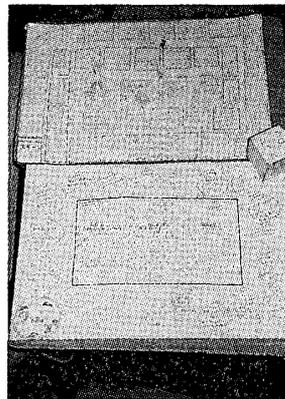
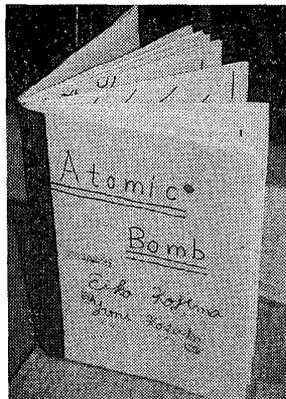
手話グループの子どもたちは、「核兵器」や「時代」など手話で表しにくい言葉にぶつかり、いろんな図書館に足を運び本を借りたり、手話のできる人を訪ねたりと幅広い活動を主体的に行っていた。また、造形や物語を作るグループもイメージがわからない時には、改めて資料や本を読み直す、おばあちゃんに話を聞くなど、制作しながらより深く知ろうとする姿勢が見られた。

「私はこのメッセージを考えているとき、原爆が恐ろしくなって書けなくなったことがあった。このメッセージをふつうに読むでは恐ろしさは感じられないので、奥深く読んでほしい。」という感想があった。表現活動の中に子どもたち一人ひとりがどのような思いを込めたのかが大切になってくる。「戦争は怖い」「嫌だ」「平和は大切」と言葉をならべるだけでなく、言葉が内なる

思いに支えられて初めて生きた言葉として表現されるのである。「資料館に写真などがかざっていてそれを見た人は『うあ』と叫んでいたが、本当は、想像を上回るほどの恐ろしさだったと思う。」と書いている子もいた。自分の思いを自分なりの方法で表現しそれを見合う活動では、作品より作品の奥にある創り手の思いをどう感じ取るかが重要になってくる。「Lifeワールド」をつくることで、子どもたちと共にそのことを確認できたことが最大の成果であった。

	テ ー マ	表 現 方 法
本	「時代に流され死んでいった人々」 「命の価値」	自分たちで考えた物語を飛び出す絵本にする。
	「原爆の落ちた広島」	聞いたことをもとに短編の小説にする。
造	「平和」	広島・長崎で見た記念碑を紙粘土で造り、対比する。
	「自由な世界へ」	長崎の街ときれいな緑の街を対比する。
	「核・戦争」 「戦争の悲惨なところ」 「戦争放棄」 「自分たちの地球」	戦争の悲惨さが感じられる街並みを再現する。
	「人生を歩むにあたって」 「生きるとは？」 「真実を生む答え」	社会の仕組み（政治・人）から戦争を考え、作品を造る。
	「心と心のつながり」 「命・平和を大切にーそして戦争のない世の中へー」	世界地図を開くとその中にいろんな国の人々が手をつなぎ現れる。
形	「明日を大切に」 「生きる」 「みんな友達」 「世界の人々が望んでいること」	8時15分を今として、過去と未来の3場面の違いを作品にする。 カセットにメッセージを録音する。
	「原爆の落ちた瞬間」	本当の街並みと造った街並みをビデオに撮り、メッセージも入れる。
	「戦争のかけと平和の光の中での命」	黒い街と透明な街を造り対比する。
新聞	「死」	自分の見てきたことを、感想も入れて新聞にまとめる。
双六	「平和活動を世界に呼びかけよう」	歴史の中でくり返し起こった争いを時代にそって双六にする。
版画	「戦争放棄とは？」 「核兵器をなくすためには？」 「戦争は人の命を奪うということ」	ゴム版を彫り、印をつくる。そしてメッセージを書く。
手話	「ひとつのものが世界を変える」	メッセージを手話で伝える。
劇	「命は大切に」 「命は宝物」	自分たちで考えた話を劇にする。

—子どもたちの作品例—



(2) 「自分」「命」に対する子どもたちの思いについて

子どもたちの内なる思いはどんなものであったのだろうか。いくつか感想を取り上げてみる。

- A児：ナガサキに行った後は、なぜか頭の中に原爆の形が残っていて、ある意味では恐ろしいです。でもそれこそ、平和のことが原爆のことより大きく頭の中に入っています。
- B児：自分自身を見つめると命を大切にしているとは思えない。「死ね」「消えろ」「失せろ」などの言葉が口から平気でとぶことがある。こんな言葉がなくなってからこそ、真の平和、真の命を大切にしていると言えるだろう。私はそう考える。「戦争をなくして」は言わない。戦争はいけないけど、最初に人の心をのどかにするのが大切だからだ。
- C児：今は、まだ殺人とかあって怖い時代だと思う。だから殺人などなくして住みよい所にした。それこそ平和だと思う。原爆の時代はみんな無差別に殺された。命の大切さをわかっていない。たった一人に一個生きるために与えられた命をもっと大切にしてほしい。自分はこんなことを言っても、たぶんあまり理解していないと思う。
- D児：命は、その人に一生でたった一つしかない。しかも無くしたらもどってこない。それをナガサキでもヒロシマでも一瞬にして無くしてしまった。一略一自分自身はこんなえらそうなことを言っているけど、本当は戦争のことなんかわからない。実際に戦争にあった人しか戦争のおそろしさはわからないだろう。ただ私が知っていることは戦争の影響だけだと思った。
- E児：言葉では、「いのち」と三文字で簡単に言い表すことができるが、命の大切さは三文字ではまとまらない。ヒロシマ・ナガサキのことを知ってから、この世の中で一番つらく悲しいことは命が消え去ること、一番最低なことは人の命を軽くあつかうことだと思った。
- F児：「命」って何？って急に言われたら困るけど、たぶん「命」というものは、人と人とを結ぶ大切な役割だと思う。自分自身「命」って言葉は、あまり口にしない言葉だけど、よく考えてみれば、あまり口にしない言葉ほど大切な言葉じゃないかと思う。

A児やB児のように、自分なりに感じたこと、平和に対する思いなどを素直に言葉に表している記述が多くあった。しかし、C児、D児、E児のような「たぶんあまり理解していない」「わからない」「まとまらない」などの言葉も多く見られた。これは、「命」「戦争」「平和」というものを自分が考えている以上に、大きく深く重いものとして捉えているとも考えられる。F児の「あまり口にしない言葉ほど大切な言葉」にも、それは表れている。これが、まさに命の尊さを感じていることの表れではないだろうか。「命って何だろう」「平和って何だろう」「自分にできることは何だろう」と自分の心に問うことが、本單元における「自分を見つめること」なのである。

4. おわりに

「広島は街は今ではすばらしい街になっている。同じ戦争で苦しんだ長崎という街はどうなっているのだろうか？長崎に行く前はこんなことを思っていた。実際に長崎に行くとすばらしい街だと思った。それは、形や外見ではなく、中身がすばらしかった。このごろの街は形や外見がよかったら『いい街だよ』などと言っているが中身がどうかわからない。でも長崎の街は、広島と同じ戦争に苦しんだ人のことや戦争の残こくさをけん命に伝えようとしていた。」

目に見えるものからその奥にある目に見えないもの（人の心や存在そのもの）を感じ取ることができる、そのことがものの見方や考え方の深まりであると実感した。このような子どもたちの柔軟で豊かな考え方にふれることのできた実践となった。